

第8章

第2次世界大戦後の内国伝道

1

ばらばらになった世界 - 内国伝道の妨げられない活動
ボランティアの協力 - 最初に集まった男女

連合軍が1944年10月21日、アーヘンに進駐した。第3帝国の崩壊は西と東においてとどまることなく進んだ。[1] 急速に山を下るようだった。1945年4月3日、アメリカ人はバートオェインハウゼンを占領した。3週間後、ヴェストファーレンが完全に解放された時、教会総会議長D. カール・コッホは、内国伝道を見わたして一刻の猶予も許さない、また必要となった地方教会の新秩序のために主導権をとった。連合軍が帝国領の西と東に進駐したところは、どの州教会でも同じことが起こった。[2]

1945年の早春、ドイツは急に西と東の軍隊に取り囲まれた。このことは、ヒトラーが要求したような数100万人のドイツ人兵士の絶望的な決戦をしなくても済ませることになった。彼らは、一部はすぐに釈放された。だが数100万人は何年も戦争捕虜として以前の敵国をさまよった。[3]

「ヨーロッパでは4千万人、そのうち700万人以上のドイツ人が戦死し、路上で悲惨な死をとげ、逃亡中に殺された。」[4] 歴史上類のない規模で大困窮が広がった。ドイツ人の2人に1人が家族を探した。廃墟では1千人が粗悪な換気状態の地下室、仮設住宅、バラック、東屋あずまや、防空壕に住んだ。母と子は避難民と化した。人は彼らをライン・ルール地方から、中部ドイツや東ドイツの小さな町や村に分散していった。すべてはつめこみすぎであった。

今や東地区のオーデル、ナイゼ両河以東の旧ドイツ領からの避難民

の終わりなき列が、黙ったうつろな顔をして困難な前途にむかって、少しずつ移動していた。東で戦車によって殲滅され、途中で殺された人たちは、道端で身をひそめるようになっていた。10万人が命をうしなった。その人たちはエルベ川の東で立ち往生して動けなくならなにかぎり助かり、大キャンプに収容された。シュレスヴィヒ - ホルシュタインでは、彼らの180万人がその土地の同数の人と一緒にぎゅうぎゅう詰めとなった。[5] ニーダーザクセンに、またバイエルン森林地帯にキャンプまたキャンプがつけられた。これは大きな緊急援助の分野になった。

ポーランドのオーデルナイゼ河の東の地から強制退去がなされた時、あと100万人が後に続いた。なお1945/46年の冬、ドイツ人は極寒の中を次々と家の外に追払われた。連合国共同管理委員会の、ひと月に20万人以上を移動させないように、また特に厳しい冬の移動は速度を落とすようにという要求は無視された。[6] それは、まるで雪崩のように殺到する者を、切り離すかのようであった。300万人、おそらくそれ以上のドイツ人が、チェコスロバキアから、ハンガリーから、ルーマニアからはより少ない人たちが、退去させられた。これらの国に10万人が抑留された。

およそ1千万人のドイツ人が西地区で1年間、避難所やバラックや大収容所に押し込まれて住まなければならなかった。[7]

爆撃で焼け出された人たちは、すべての警告を無視し、廃墟の町に引き返すようにせきたてられた。数100万人もの連行されてきた外国人、その中にいた、ドイツで強制労働者として農場で、また軍備工場で働かねばならなかった200万人のロシア人とポーランド人の婦人と娘は、解放された。だがその中の10万人はもう故郷に帰ろうとはしなかった。彼らの中には労働できなくなった数え切れない人たちがいた。彼らは収容所にとどまった。国中に略奪者のグループがいた。[9]

ドイツ人捕虜収容所はかなりの時間がたって合法的なものになり、本国への送還は順調に実行されるようになった。連合国共同管理委員会は、そのための面倒をみた。

退去させられたドイツ兵士たちの最初の輸送が始まった。だが能力

のある人はとにかく理屈^{きがすいしゆ}ぬきに大きな駅で降ろされた。彼らはぼろぼろの制服を着て、よく飢餓水腫になり、助ける者がなく途方にくれてそこに立っていた。爆発で出来た破裂口やロケット弾の穴から救える戦争傷病者は10万人をこえて数えられた。手足を切断した人のための義手や義足が不足した。[10]

破壊された都市、住宅難、避難民の悲惨、空腹の人たちが泣いていた。いずれにしても、実際に満腹して暮らせるような人はいなかった。戦争から無傷で残った地域はまだ荒廃していなかった。ある人を、すべての人があるいは多くの人助けたとしても、ほかの人々は極貧のままそこにいた。紛争の火種の中に収容された人たちは、十分に緊張をひきおこす要因があった。かつて、ここにあったものは、多くの人にとって、今日はぼんやりとして、あいまいな、ずっと前の過去のものとなっている。だが彼らを忘れてはならない！

残りのドイツを4つの占領地域に分割した占領国は解消困難な課題に直面した。まず迫ってくる混乱に立ち向かう人たちがいた。それは突然起こったことではない。すでに1941年と42年の冬に、あとで戦勝国となった国々で専門的知識をもった職員が、敗戦国ドイツで待ち受ける差し迫った課題に備えるために、西とおなじように東で募集された。ドイツ「管理機構」はその時、計画に入れられるべきであった。「犯罪歴のない人たち」のリスト、ドイツ人のリスト、牧師と聖職者のリストはもしかしたら使えるように整理されていたのかもしれない。[11]

多くのことは流れの中にとどまっていた。彼らがドイツ人と行動しなければならぬ、それ以上にイメージされる目標は、占領国の下ではっきりしていなかった。それでも、彼らは占領された国の中で破局を防ごうとした。国にいるそれぞれの軍隊に対する、注意義務が命じられた。いずれにしても、彼らはとりわけ避難民のあいだに蔓延している赤痢とチフスの疫病と精力的に闘い、また食べるものがなくなって起こる飢餓もいたるところで包囲し、予防された。もちろん連合国のもとで取り決められた食料分配は、カロリー計算にしたがって、それぞれの占領地域におけるあらゆる変化に対応して、とりあえず最下

層の国境地帯でなされた。その時多くの子どもたちと老人たちが 栄養不良の犠牲に陥った。1,500万人のドイツの子どもたちについて、2つの戦争の後で1,200万人が栄養失調と報告され、その750万人は避難民の家族であった。

そして、そこに故郷を失った子どもたちがいた！

これらの身寄りのない子どもたちの面倒を見ようというシグナルがベルリンから出された。イギリスの赤十字が1945年の年末に主導権をとった。ヴェストファーレンの福祉連盟は、ベルリンの廃墟から集められた1,000人をこえる孤児を引き受けた。イギリスの赤十字が輸送をおこない、パートザルツフレンで検疫所の建設を助けた。同じように他のイギリスの連盟で例えば救世軍のような連盟と一緒に働いた。プレーセ救世軍少佐は、さらに鉄道輸送でドイツ人の子どもたちを、フランスの地域で「行方不明になった」子どもたちより以上に、デンマークの収容所から搬出した。彼は成果を上げた。「ドイツ人孤児は当時一國をこえた問題であった。」

ついに家族再会共同事業と結びついた子ども再会共同事業が生まれた。東欧ブロックの諸国はドイツ人の子どもたちを解放するために行動しなければならなかった。運ばれる人たちは明らかにされねばならなかった。多くのことが政治的理由で長い間進まなかった。およそ10万人の子どもたちが、時には毎日500人の子どもたちが、西地区に到着し、それが1年繰返された。[12]

「このことは、ドイツ人の意識の中に決して十分入ってこなかった。ドイツ国内にある3つの軍政府の権威がなければ、多くのことは非常に困難であり、差し迫った無秩序を克服することはできなかつただろう。貧窮の中にいる大多数の人たちは革命のスローガンに無感動のままであったが、大貧窮は崩壊と無秩序の危険を自分の中にもっていた。また、そそのかすとむごい裏切りを、復讐とは違ったほかのものに向けたならば、一大粛清は少なくとも地域ごとに追放するというにはならなかつたのではないだろうか。誰が毎月ドイツ中のすべての地を巡り歩くだろうか！追い立てられたドイツ人だけがいたのではない。追い出された家族をさがしてさすらう人たちだけがいたのではない。

家や泊まるどころがなく追い立てられてきた人たちだけがいたのではない。長いあいだ欲しいと願っていた外国人労働者と、また里心と復讐心と略奪の欲望の間を揺れ動くドイツの強制収容所の中にいる「外国人」も同じように多くの村を危険にした。それどころか軍政府は、それがよいものであっても、悪いものであっても、ドイツの歴史のその時点で、無秩序に対する防壁であった。そしてなんととっても栄養失調死に対しても同じように防壁であった。というのは、私たちがしたことはできることであり、ドイツの自助のために命令や規定をこえて解放されることであった。それは私たちの民族全体のためにいくらかでも命を養うことには決してならなかっただろう。」[13]

軍政府が関係事者たちに求めていた親交禁止は守られ、不利になった公務員全員の交替が保証されるかぎり、なお現存するドイツ行政機構があった。彼らは崩壊の混乱に巻き込まれなかった唯一の機関であったのに、何のために巨大な教会のからだを必要としたのだろうか？教会指導部の組織全体は、中央部局を超えて個々の牧師職にいたるまで、すでに「ナチ」の急進的な信奉者によって浄化されようとしていたか、されていた。[14]

教会は破壊された礼拝堂、牧師館、そして信徒会館で^{がれき}瓦礫を取り除くために、また精神的に動揺した教会員が互いに労し力をあわせるために、十分なことをしてこなかったのではないか？日々の状況はいかに多くのことがここで解決されたかを示している。

教会にとって、他に厳しく監視されるべき集会禁止の公布はなされなかった。礼拝堂、牧師館、信徒会館に軍人が立入ることはなかった。ロシア兵士たちにも同様の厳しい禁止があった。礼拝出席をさえぎる人は誰もいなかった。これは[ソビエト占領下の]東部地区にも区別なくすべてに妥当した。国と教会の区別はそこで当然現実性をもってきた。このことはロシア占領軍の母国の側から不快なやり方で起こった。それらはゆっくりと進んでいった。[15]

4つの地区のすべてに、4つの「D」の実行が共通してなされた。非武装化すること、解体、武器の使用を不可能にすること、そして民主化することである。その際、翻訳不可能なことは、はじめから西と東

の民主化理解が異なっていることであった。ロシア軍政府は、すべて東西ドイツ境界の暫定性を強調し、他方彼らは「森林の国境」を密集地帯とし、東部地区において、同じように自分の法的立場を次第に弾力的に、しかも効果的に、優先的に拡充した。ドイツの分割は第2次世界大戦の結果として現実となり、あとにそのような災厄に再びさらされることのないように隣接する諸民族を保護した。ドイツ自らが招いたこの事実を和らげるものはなかった。責任はドイツ自身にあるのだった。[16]

内国伝道とカリタスは激しく巻きこまれていった。国家社会主義政権は、彼らを制限したが、活動を出来なくしたのではない。今やこの重圧は非常に重いものであった。内国伝道の職員たちは、小さく溶けてなくなりそうな少数派にいたるまで、あつという間に封じこめようとした熱狂的政権信奉者に反対して足並みをそろえて戦い抜く群れであった。活動の制限を考える人はいなかった。[17]

施設の中では、いたるところで道から瓦礫を取り除く活動が徐々に進められた。戦争で亡くなった人は別として、なお約3万6千人の正規の職員が自由に働き、その中に福音主義ディアコニー協会のような、ディアコニッセの家出身のおよそ2万8千人の独身のシュヴェスターたちもいた。彼女たちは、これまで都市の福祉がしてきたすき間に足を踏み入れなければならなかった。終戦時に、彼女たちはほとんど何人も残っていなかった。そして、福祉職は活動を停止していた。[18] ここで奉仕業務は代行しておこなわれるだけであった。

内国伝道は仕事の継続を妨害されることはなかった。このことは東部地区でも言えた。破壊された施設の修理や損傷をうけた病院の資金の調達はうまくいかなかった。1945年以前に徴収された施設のすべての返還は成功していない。法的状況も異なったものとなった。[19] 中立的外国から、スカンジナビア、あるいはスイスから救援に送られた物資は比較的早く、定員過剰の避難民がいる困窮地域に、メークレンブルクに、そしてオーデルブルックに送られた。「そのころ、確かに大きな困難に直面し、ともかく私たちの教会共同体によって進められた寄付を集め、また不幸な地域にある中部、東ドイツに運んだ。また、そ

の中で決して親交を結ばない問題のある軍政府の中で、利口な人たちは出会っていた」[20]

内国伝道の自発的協力はいつも必要からなされ、瓦礫をかたづける時、修復作業の時、あるいは何かの時にはいつでもなされた。それはただちにすべての階層から、長と上級参事官により、すべての職を通して、青年男女に伝えられた。ナチスの時代に他の場所ではとても不可能になっていたキリストの磔刑像^{たっけい}が、例えばバイエルンのミュンヘンのような特色ある地域では学校の部屋の中にあり、ギムナジウムにも、病院にも取り付けたままであった、それはただちに取り付けられるようになった。これはヴェルテンベルグでも言えることであり、ハノーバーと同様に、ラインラントとヴェストファーレンで、信仰覚醒の特色を持つすべての地域において、またフランケンにおいても言えることであった。困難な戦時中に人は故郷で、前線で結束を学び経験した。今はもっと結束を実証している。

これらの内的準備ができた無給の援助者たちは、なお自ら清貧を貫くが、そうして慈悲を学び、次の活動をするように導かれていたと思われる。即ち、「君は君の孤立無援を苦しむだろう。君はここかしこで、最悪の困窮のいくらかを和らげうるだけであるが、天からのパンを分かちあうならば、君はその時愛の使者として、喜びを経験するだろう。」[21]

召命を受けた活動家が最後までがんばった奉仕共同体の旧来の伝統は、すべて不屈であった。彼らは一般的に活動の不利益になるというのではなく、敬虔主義の特徴をもつ過去の政治体制の下で、信仰の闘いを屈することなく導くべきだと思ってきた。安っぽい理想を求めたのではなく、彼らにとって規律、秩序、耐乏といった古くからの美德は、なお変らない価値を持っていて、無欲と財政的免除は彼らが以前から行ったように印象深くなされていた。内国伝道中央委員会の関心事は連帯と援助の意識を高めることであった。1848年来、続いてきた尊敬すべき中央組織は第3帝国の中にも存在し、戦時中に内国伝道の多くのそれぞれの事業の側に立ち、助言し、助けた。[22] これは無駄ではなかった。ある種の原則があることは当然のことであった。職業

についた労働者の多くは登録団体の中に入って自分の仕事に仕え、働いた。中央委員会がその中の幾分かを政府機関から持ち込んだ、統制経済は拒絶された。人は教会の中で、教会と共に働いてきた、しかし教会の下で働いたのではない。慈善行為に関する教会会議の運営はこれまでいつも停滞していた。内国伝道、教会のすべての民間事業は、効果的につつましく政府機関のようにやりくりしたと思われる証拠が100倍も1,000倍もある。職員たちは限られた活動領域にも同様に、創造的な自由裁量ができることを知っていた。冷静さとリスクへの備えは高く評価されるようになった。

この体制を再建するために、最初にきた男女の中には強制収容所と監獄からやってきた者もいた。国民に不可避免的に近づく崩壊を前にして、彼らはすでに新しい出発の構想をもって、非常にわずかでもはっきりした諸計画へと濃縮していた。彼らが活動に踏み込んだところ、そこにはかなりの程度まで教育によってはつくり出せない特別な才能の持ち主によって特色をもっていた。神は彼らと共に「救いにいらさせてくださった」。^[23] 私たちは彼らをここでそれぞれ別の人と思い、名前の分からない多くの人たちに対して、不十分で恩知らずのままであった。彼らは忘れられてはならない。彼らは未知の、また試みたことのない土地で進撃にとりかかった、それは前から考えられていたことである。^[24]

この世を越えた洞察力をもっている時のみ、人は世界を理解した。ディアコニーの形態は、私たちに向かってくる神の日[終末]の朝焼けのようでしかない、終わりから2番目のまた仮の現実、過渡的状态にすぎない。ディアコニーは故郷の宿である。彼らはそこに向かって遍歴し、そしてこの期待の中で、使命に充たされ、死にかけている人のもとへ、病人や苦しんでいる人のもとへ足を踏み入れた。この世の楽園の夢を見るのではない。広い展望、この終末的次元は解放され、キリストのもとへ案内する、また、主の名における思考、能力、そして献身を求めた。^[25]

フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンクは次のように言い残している。「人は医学をあらゆるところで用いることができる。ペーテ

ルの目標は、それ以上に永遠を目指している。」

彼はその時、一生を病気でいる人を慰め、あの世についてその場限りの希望をいだかせるのでない、そうでなく、彼が隣人に対する関係と神に所属している事を発見して生きるならば、それはまず肉体と精神と霊によって成り立っている彼の人間存在を見出す。この包括的な意味で、生への適切な助けがあるということ、そのことが重要である。」 治る見込みのない場合でも、生きる苦悩に烙印を押すものは誰もいない。[26]

2

再建の世代 - 希望のシグナル - 鉄道伝道と都市伝道
教会共同体の訴え

その事についてどれほど無防備に語れるだろうか？再建の世代はこの間に多くの疑いを浴びせられてきた。彼らはなすべき多くのことがあって、向こう見ずに「全力投球」をし、熟考することは時間がないので、後の世代に委ねたように思われる。彼らは生き延びるために裸になって非常に厳しい状況にならねばならなかった。しかし、崩壊後の初めの12年間を回想すると、社会の経済発展は思いがけなかった。純粋に唯物論的な考え方をもっている労働倫理は、裕福な市民階級を生み出した。[27]

私たちは問い直してみたいと思っているのだが、それは長い戦争を経験した一つの世代ではなかつただろうか？「どれだけ多くの人たちが、ながい間耐えることを学んできたことだろう。私たちは何も言わないで、あきらめないで、窮乏の流れに立ち向かって守り抜き、その中に乾いたところを見つけて、私たちの隣人だけでなく、誰でもこの救護の場に受け入れようと決心していた。」[28]

この基本的態度において、ディアコニーで働く青年男女を、引き離すものは何か？礼拝は来る人が多くなり、人は教会で聞いた。それは大変役立つようになった。それゆえ、この再建の世代はまったく無気

力で唯物論的であったというわけではない。努力、規律、成果、礼節、豊かさ、評判は美德であった。だが、他の人たちに要求しない愛、連帯、謙虚、自助も同じように、強調されるようになった。成果がなければ、勘定は支払われない。外見的に、ただたんに歴史的にゆがめないうで現在を知ること、最終的判断をする前に絶えず注意し、それは誤った評価であると注意することもできるようになった。

そのような観察が戦後世代の人たちの中で優勢ではなかっただろうか？一般的に崩壊後の安堵があった。ついに戦いはやんだ、もう戦争はない、戦いはない、ドイツの軍隊はない、爆弾なしに生きている。[29]

山上の説教はそのような新しい目で読まれるようになった。そのように読まれてはいなかったのである。[30] すでに1945年に政治運動の全体が影響を受けていた。不安な環境から救われて自由だ！前方に掲げたスローガンに縛られることなく、自由にでき、読み、また自分の方向を決めることができる。人は幽霊のような陰鬱な日常生活の中で、美のため、演劇のため、美術のため、音楽のために何度も努力した。壁の残骸のなかで遊ぶ子どもたちは都市の廃墟の中での生活をむずかしくした。確かに、もっとも手近なところで明日のパン、住む家、子どもの靴、近づく冬の暖房をどうにかしなければならなかった。1945年と46年、1946年と47年の冬は厳しい寒さだった！

精神的にも身体的にも、生きのびることが重要問題であった。多くの人たちがこの状況を克服できなかった。嫌なことが注意をひいた。人はこれまであまりにも見せかけの理想ばかりを与えてきた。しばしばどぎつい自己中心の中であって、態度は限りなく冷静に変わった。逃げられるものはみな逃げろ！人はささいなことで、感情を抑えきれずに爆発した。闇市場がはびこった。通貨改革がされないうちは、たばこ通貨との交換が繰り返された。[31]

どんなに多くの人たちが裸の困窮から連れ立って盗むようになり、仕分線で石炭列車を荒らしたことだろう。通貨切り替え前のドイツ貨幣ではほとんど何も買えなかった。「福音主義救援組織」の救援物資を乗せた貨車は監視されて目的地に運んだ。都市には安全な倉庫が不足していた。彼らは不安な昼と夜を守らなければならなかった。ロシア

の占領地域にあるポーランド国境まで運んだ(例えばバーゼルのキリスト教救難訓練施設の)実直なスイス人自動車運転手は、あの危険な時に「高速道路交替要員」と共に、盗品を道路の側溝で待っている相棒に投げ渡すために高速道路の上り道で徐行するトラックの連絡口をこじあける集団と何度も争ってきた。攻撃はスパナとジャッキをもって撃退された。これらの救援物資の輸送はソビエトの使信を付けて、ベルリンのロシア占領地域に送られ、住民への配布は妨害も支障もなく完全におこなわれた。[32]

崩壊後、カリタスが力の限り始めたように、内国伝道も貧窮に立ち向かい無数の人たちの、希望のシグナルとなった。その顕著な例を示すと、「終戦後、1945年または1946年に捕虜となったか、または避難民となったか、爆撃で焼け出されたか、故郷から追放された人たちが初めてベートルにきた時、彼らは一様に報告している。即ち、彼らはベートルの共同体が戦争のことを何も知らなかったかのような『癒された世界』にきているという第一印象をもった。・・・荒波はベートルにも押し寄せた、だが、彼らのはのみこまれなかった。・・・施設の管理組織と経済組織は、内国伝道中央委員会には用地がないにもかかわらず、西側占領地区のために、ヴェストファーレン福音主義州教会とヴェストファーレン福音主義新聞連盟が施設用地を避難所に提供した限り無傷であった。

難民収容所、また難民の子どもの家として、空け渡されたサレプタ学校に、2万5千人をこえる難民と故郷から追放された人たちが受け入れられた。最初の行方不明者援護機関が組織されるとすぐそちらに送られた」。だがそのような活動は他のところでも同じようになされたのである。[33]

東ベルリンの広い地域にあるローベタールが見落されてはならない。崩壊の恐怖の中でパウル・ゲルハルト・ブラウネ牧師のもとにあるローベタールの大家族は破壊された施設、庭、畑を嘆いた。そしてなお、1945年前後のローベタールは、何千という人たちを救援する目標をもち続けた。「燃えるような信仰による、主なる神の日々の助けは、すべての人にとって日々の生活に必要な最低限の援助であった。その

頃はとにかくその日その日であったのである。』[34] それは残ったドイツの大規模施設共同体の中はかなり見られた。彼らはその日暮しをしているのに、数千人の人を援助することができた。

鉄道交通は幹線で次第に再開されるようになった。1938年以來、中絶していた鉄道ミッションが再び活動をはじめた。かつての男女の援助者たちが迅速に行動し、再びその場に集まった。すぐに全地域に鉄道ミッションの連絡網が張られた。「以前、鉄道ミッションに場所を提供していた多くの鉄道の建物は破壊され、すべては古いバラック、駅の地下室がいつもの宿泊所となり、たびたび粗悪な環境となった。すべての巨大都市と中都市の駅と鉄道ミッションの中で、特にハノーバーは、少なくとも東部地区に遮断された場所、とりわけベルリンより傑出していた。駅の広い地下室は、昼も夜も助けを必要とする人たちの大キャンプと同じだった。』[35]

「西側占領地域では1946年だけでも、200万人を越す避難民が東からきて、彼らの世話を受けるようになった。この避難民の流れは帰国者たちによって引き離された。そこで1945年後最初の年にロシアから約60万人の、主に病気のために働けなくて追い出された帰国者が、私たちの駅にやってきた。』[36]

多くの課題が荒廃した都市の都市伝道に押し寄せた。爆撃地獄の中で全部あるいは半分が瓦礫の山となり、特に影響のあった場所の復興は殆ど進まなかった。あまりにも多くの貧窮が目立った。都市では250万戸の住宅が破壊され、150万戸が半壊した。残ったところに故郷を追われた人たちや避難民がどっと殺到した。

都市伝道がしなければならなかったこと、また出来たことの多くはほとんど冒険的なものであった。例えば、ミュンヘンの都市伝道は、住み、集会し、働くことを一度は禁じられた、ヘルツォークスエグミュレの土地と建物を、アメリカ占領軍から返還してもらうことに成功した。その後、他の5つの福祉連盟の競争がすでに始まっていた。都市伝道は他の方法での補充により、一日のリードを勝ち得ていた。[37]ところが、すぐにアメリカのトラックが捕虜収容所に来て、10日のうちに1,400人の手足の切断手術を受けた人をそこに集めた。彼らの中

の一人、とりわけ足を失った人で専門家であった人は、紙やグラスコップから、2年は使用できる仮の義足(義手)をつくりあげた。バイエルンで足を失った1,000人の人が呼び集められた。[38]

そしてその時、戦争で目が不自由になった人たちがいた!

ハノーバーでは内国伝道が、もう一度つくりなおすことができる金や銀といった貴金属を、負傷者や義足・義手のために集めた。[39] 自助事業が始まった。

都市の中はなんと飢えていたことか! 田舎への買出し旅行も、人は超満員の列車の中に十分持ち込めずステップの踏み段に一緒に乗っていくほどであった。戦争中に「普通の消費者」に分配されたその3分の1さえ、分配されなかった。当時の栄養状態に関する正確な調査のとおりである。[40]

都市周辺にある数え切れないほどの工場と商店が、廃墟の中で、他のものに解体された。なお被害をまぬかれた多くは、原料不足から稼働出来なかった。瓦礫を片付ける女たちは、わずかな時間給で、裸の手で役に立つレンガを瓦礫のなかからより分けた。

今や内国伝道かカリタスか、どちらかに組織された人たちは、郊外で、たいていは性能の低い木ガストラックで、くる日も来る日もジャガイモを物乞いして集めた。このことは軍政府の承諾を得てすでに1945年に始まっていた。今や50kgのジャガイモの数百が、教区を通して、都市にまた直接家に、難民収容所、戦争捕虜収容所、抑留所に、病院に分配されるようになった。公営給食所と子どもの給食所が開設された。だが、それはまた焼け石に水であった。それで何ができるというのだろうか! [41]

スカートを2つもっている人は1つを与えなさい。教会共同体のなかで、戦争中に負傷して帰ってきた共同体の人はどうしても必要とするものでなければこだわらないで受け取るように頼まれた。困窮者のための収穫感謝祭の献げ物は、1945年全ての州教会で集められ、1945年クリスマスにもう一度繰返された。軍人のためにスカートとズボンが集められ、除隊証をもって前に出てきた人が、それを受け取った。ケルンでは帰郷していない人たちの家族は、戸棚にかけられている背広

上下を身体障害者のために提供するように求められた。彼らは駅の敷地でぼろぼろの服を着てぼんやりと立っていた。[42] 困窮は限りなく大きかった。助けようと思う人は戸棚を片付けるだろう。ひどい困窮が徐々に押し寄せてくるようになった。最上の成果は、再びよみがえった都市の社会福祉事務所が慈善活動を協力してやっていくところに表われた。

教会共同体から多くのものが贈られた。残されたドイツ全体を見ると、デノミネーション通貨の単位切り下げ前の、あの1年の初めに、1945年前よりもはるかに多い、総額数百万の寄付があった。それは飛躍的な高さに上った。[42]

最初のひどい年にはまた資金が足りなかった。あちこちの空き家、廃棄された爆薬庫、そしてふさがることのない収容所は、借金しないでも、借りられるようになった。それらは帰るところのない若者と子どもたち、老人のために、保養施設や再教育の場として、次第に開設されていった。繰り返す新しい可能性が生まれ、閉じられていた扉は開かれるようになった。礼金も支払わなければならなかった。事業拡張は何度も突然におこなわれた。

だが「破壊された世界のただ中では、家と財産、信仰と希望のすべてを失った人たちのおびただしい数の墓に」、多くの救援意志と創意に満ちた愛が、多くのあきらめと弱気と共に示された。

3

内国伝道中央委員会の活動再開 - 社会福祉の前衛連盟共同事業体 管理委員会規則第22号に反対する抵抗

それは、内国伝道のはるかにひろがった活動領域のいたるところで待たれるようになった。内国伝道中央委員会の活動なしには先に進むことが出来ず、1945年以前と同じように、指導と専門的な助言と助けを必要とした。中央委員会は崩壊直後、かなりはやい時期にその現場にいた。1945年8月23日、ペーテルにおける最初の集会で、中央委員

会は新しく2つのセンターを設立した。ひとつは「内国伝道の中央委員会 - 西として、以前は活発でなかったが、フリードリッヒ・ミュンヒマイヤー牧師がディレクターをしている道標ベートルを必要とし、もうひとつは、ベルリン・ダーレムで破壊されずに残っていた古い建物を本拠地とする中央委員会 - 東である。それは、また教会評議員の中でテオドーア・ヴェンツェル博士がディレクターをしていた。[44] 内国伝道の州連盟と専門分野連盟は、再び統合された。

社会福祉先端連盟、即ち、内国伝道の救援事業、カリタス、赤十字、労働者福祉団、同権福祉連盟、ユダヤ教福祉団が一緒になり、できるだけ協力できるように、改めてゆるやかな共同事業体を形成した。[45] 政府機関に対する連邦州の啓発的な関わりは、新しく整備された。特に、始めのうちは頼りにできる統一した部署がないということが、長い間問題であった。軍政府はいつも相互の意見を調整しないで、まさに独断的に振舞った。だが、中央委員会 - 西は、カリタスと共に難しいフランス軍政府とバーデンで会談し、会談を継続することに成功した。[46]

再生したドイツ政府機関の担当部局に対して、1945年以前に語らなければならなかった共通の決められた言葉が再び必要とされた。「私たちは次のことについて国を容認できない。すなわち国は、実際に実績を持つ社会福祉を追い立てた。私たちは州政府に次のように言った。私たちは国家のために呼び集めるナチの手法を続けることを基本的に認めない。4週のすべてで、国の、地方の郡庁所在地で、あるいは州庁所在地で、何らかの人道上の目的のために募金をした。国は税と交付によって、資金を融通する使命をもっており、民間の社会福祉だけに、自由な献身を呼びかける権利を与えた。もし私たちが国に求めるならば、私たちがなしうる奉仕に必要なポストを要求する権利を十分に持っている。」「どんなに意味ありげに見える権力政治の検討もこの新しい民主主義のなかでなされるのであって、私たちとカリタスは毎週の支出が収入より多い時でも、貧困者と病人、また貧窮者に必要な務めをなし、見放すわけにはいかなかった。[47]

内国伝道は1953年まで、第3帝国が彼らを財政的に破滅させるため

に、陰険なやり方でしてきた権力支配から自由になるためにどんなに粘り強く格闘しなければならなかったことだろう！」[48] このことは管理委員会規則第22条に対する拒否についても言える。私たちはここで、彼らの前歴を問わない。しかし、すでに1946年、中央委員会 - 西は、管理委員会第22条に反対し抵抗しなければならなかった。奇妙な時代錯誤、まさに対立の中で、内国伝道は、施設にいる何千もの職員のために経営委員会の導入を要求しなければならなくなった。それは一致して、「労働組合の協力がまったく問題にならない」ということであった。そこで、内国伝道の事業の中でこれまでの父権的な指導は、すでに内部で働いているすべての人の連合体の内部で変わり、給料問題と老人保健の抜本的な改善に取り組んできた。[49] 解放をめざそうとする職員代表に対する拒絶は明白であった！

「過去からのつらい経験は、私たちにいつも世俗化していく傾向と、私たちの活動を妨げる傾向に注意を求めている。私たちは、私たちの活動が(キリストの福音を)宣べ伝えようとする自覚を、いつも明らかにし守ってきた。その際、私たちはヴィヘルンの言葉を守ろうとしているのかどうか。キリスト教の救援活動の課題が取り除くことの出来ない内外の困窮を、内国伝道が知らないことはない。または私たちは自分の力の限界を考えて、私たちに命じている課題を制限すべきかどうかという、古くからの問いを改めて問われている。」[50]

このことについては、あまり根本的議論をしないが、内国伝道のすべての活動をその中に織り込んでいるので、ドイツ福音主義教会救援事業は誰もが遭遇する大貧窮にいつも突き進んでいった。だが、結核の死亡例は、1939年に4万2千人から、1947年には20万人に増加し、そのあとにつづく数年は、およそ100万人にのぼった。性病の数は、西地区の人口過剰を考慮しても、結核よりも急激に増大した。そのうち20歳以下の若者の3分の1が亡くなった。[51] ここで救われた全ての人たちは互いに助け合わねばならなかった。それは実際に起こったことなのである。